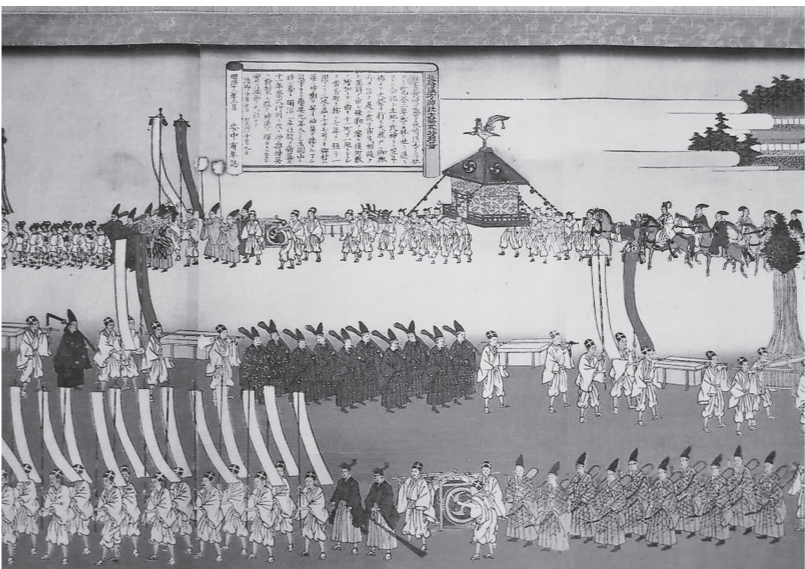


明治期のマルチ人間安中半三郎

日宇 孝良

長崎文庫の創設・長崎盲啞学校の設立に尽力

安中家の墓誌によれば、安中半三郎の祖父は、武州青梅(東京都青梅市)の人で、安永年間に長崎に来住。父為俊はその第五子であった。為俊は19歳で江戸に出て、以後、長崎・江戸間を頻繁に往来したが、万延元年(1860)帰崎し、酒屋町(現・栄町)で書籍・新聞・文具・雜貨商を営んだ。半三郎の母蝶は越後国(新潟県)の出身で19歳で江戸で為俊に嫁ぎ、五男一女を生み、34歳で長崎で没した。



長崎諏訪大祭式行列図

安中半三郎は、嘉永6年(1853)江戸神田相生町に生まれた。諱(いみな)は東来。6歳の時、父に従って長崎に来住。長川東州・池原日南について和漢学を学んだ。大正末年に刊行された『明治維新以後の長崎』によれば、そのひとりとは『資性剛健潤達にして多芸多能能く詠み能く談じ能く書き能く飲み酔ふて耳熟すれば詞藻湧くが如く又談論風発の概あり』と記されている。

り、被災者の支援を行った。明治26年(1893)長崎慈善会が設立され、その発起人総代となり、会の事務所は安中宅に置かれた。長崎慈善会の活動の一環として、明治31年(1898)長崎盲啞院(私立)を設立した。盲啞学校としては全国で3番目に古く、しかも、先駆けた京都・東京の官立の盲啞学校と違って、安中半三郎を始めとする民間人の手により私立として設立されたことも特筆すべきことであった。当初、この学校は長崎市興善町の野村惣四郎宅の一部を仮校舎としたが、生徒数の増加により、同町の民家を借りて移り、名称も長崎盲啞学校と改称され、明治41年(1908)には長崎市桜馬場に新校舎が建築された。半三郎は、大正4年(1915)11月、多年慈善事業に尽した功績により、長崎県知事李家隆介より木杯一組を賜り、表彰された。

半三郎は、狂句狂歌も嗜み、「素平連(すべれん)」という趣味の会を主宰、『類題醉狂句集』を明治17年(1884)に出版した。長崎公園の月見茶屋と噴水のある敷地の一角に東来碑があり、判読困難になっているものの半三郎の35首の歌碑が刻まれている。諏訪神社に「長崎諏訪神社大祭式行列図」という一幅の絵巻がある。木箱の表題には「御神幸絵巻」と記され、白石民子氏より川添氏に贈られたものが、昭和51年川添清次氏より諏訪神社に奉納された由が述べられ、絵巻の中にこの諏訪神社の神輿・神具が明治11年(1878)新調されたのを契機に翌年この絵巻が作成されたことが、安中有年(半三郎の諱)の名で記されている。

半三郎は、大正10年(1921)69歳で亡くなった。墓碑は、本蓮寺境内にあるが、葬儀は神葬として執り行われた。「酒飲めば 浮世をよそに 捨小船 ただよふてこそ たのしかりけれ」という辞世の句を残している。

翌年慈善会の三十周年、盲啞学校の二十五周年を記念して盲啞学校の校庭に「安中翁記念碑」が建てられた。この記念碑は、現在移転した長崎県立盲学校(時津町西時津郷)の玄関前に移築されている。盲学校の校長室には、歴代22代の校長先生の肖像写真の先頭に、「本校創立者」として、ひととき大きく安中半三郎の写真が掲げられている。

安中半三郎は、長崎の政治・経済界のリーダーとしての活躍に加えて、文化事業や社会福祉事業の先駆者としても活躍した。先見性を持ちつつ、その才能を公私見事なバランスで開花させた稀有な人物であった。

(地方史研究会事務局長)

半三郎は、酒屋町で「虎与号」の屋号で、父からの家業を継承。時には出版活動も行っていたようで、香月薫平著の『長崎地名考』(明治26年刊)は、安中書店の発行となっている。北原雅長市長時代の明治22年から28年(1889~1895)にかけて市会議員を務め、水道建設問題、九州鉄道長崎線敷設問題等に関わった。また、明治30年から35年(1897~1902)にかけて、市の執行機関としての名誉職の参事会員(市会で選出)として、港湾改良工事問題等に関わった。

また長崎商工会議所の前身である長崎商業会議所の設立にも発起人の一人として創立準備の時から深く関わり、明治27年の商業会議所議員選挙から大正2年(1894~1913)まで、約20年にわたって、商業会議所議員を務めた。その間、明治28年から明治42年(1895~1909)の間に三度にわたり、商業会議所の副会頭の要職を務め、松田源五郎、岩田清秋、永見寛二等歴代会頭をよく補佐した。

明治27年(1894)5月2日公共図書館の先駆とも言うべき長崎文庫が長崎市新橋町(現・市立中央保育所所在地)で発足した。この長崎文庫は、明治30年(1897)に引地町に、その後長崎商品陳列所内(現・日本銀行長崎支店)に移転、明治45年(1912)に発足した県立長崎図書館に引き継がれ、大正4年(1915)に県立長崎図書館が移築され、その際立派な表紙の受け入れ台帳が作成され現存している。その台帳の大正5年(1916)9月5日の日付の欄に長崎文庫(代表者安中半三郎)から県立長崎図書館への寄贈本の一覧が10ページ(項目にして342項目、冊数にして約400冊)にわたり列挙されている。また、明治27年~28年(1894~95)にかけて長崎古文書刊行会により刊行された『長崎叢書』は、西道仙とともに安中半三郎が校閲者として名前を連ねている。

明治24年(1891)に愛知・岐阜県を中心とした震災が起きたとき半三郎は、いち早く新大工町の舞鶴座で慈善音楽幻燈会を開き、金品を募

風信

○旧八月十五日(九月三十日)の夜は「仲秋の名月」であり、旧八月十八日(十月三日)は「居待の月」である。文化元年(二八〇四)長崎奉行所支配勘定役として着任した太田蜀山人は長崎諏訪神社より眺めた名月を「土地の言葉をつかつて」と題して、彦山の名月を「こんげん良か月や えつとなかばい」と詠んでいる。

○良寛和尚の歌集の中に「月よみの光を待ちて帰りませ 山路は栗のいがの多き」とあった。之の「月の光」と「栗の毬」の言葉の中に「現代世相の混濁」と其の救いの道について考えさせられるものがある。

○さて九月・十月は「長崎くんち」の事もあって、分室の事務局は一人であり多忙で大いに苦労しておられる。

○更に本月は、恒例の長崎日本ポルトガル協会との協賛研修旅行。長崎古曲保存運動に協賛しての「長崎座敷唄家元発会」準備・「長崎民謡協会再発足会」設立準備等と多忙。次いで十一月三日文化の日は恒例により長崎市立図書館主催「第五回長崎学講座」のため今年も私に講師依頼あり、十月中旬までには「其の講座概要を提出せよ」との事。今年、私は「長崎のまちを訪ねて―佛像を中心に―」という事にした。

○長崎八坂町清水寺より「大人の寺子屋」を今月より来年三月まで開講したので大いに参加して下さいとの事。講座内容は、ものしり長崎寺子屋話。音曲・歌舞の講座・長崎職人話など。尚、定員がありますので御連絡くださいとの事(090-4993-3594松原まで)

○九月より再開した本会恒例の各講座いずれも好評。特に竹之下・江口・吉田・田村・山脇各氏を中心とした毎週水曜午後二時開催の自由参加「水曜懇話会」は参加多し。(会費不要)

○今月ご寄贈いただいた書籍

対馬・小松勝助先生より、『長崎県謎解き散歩』新人物往来社刊。長崎県下の歴史・祭礼・史跡等を原田博二・福田八郎・小松勝助の三先生編著により良くまとめられていた。(八〇〇円)

松下幸子先生より『江戸料理読本』。松下先生の食文化研究は有名であり特に江戸料理の研究では第一の人であられる。(筑摩書房 一、一〇〇円)

長崎純心大学より『平成二三年度生涯学習センター広報』
十八銀行長崎経済研究所より『ながさき経済2012・8』長崎の経済事情をよく認識するうえで必読の書である。

長崎歴史文化協会研究室

TEL八二二一五四〇
十八銀行公会堂前出張所二F

